



「林原家 同族経営への警鐘」

林原 健 著

日経BP社発行 初版2014年5月

定価本体1500+税

JR岡山駅東口を降りると、ものの数分歩いて大きなイオンモールの建設現場に突き当たる。ここはかつて糖質トレハロースやインターフェロンの製造で世界的な規模のバイオ企業として名を馳せた株式会社林原の本社があったが、残念なことに同社は2013年に経営破たんにより長瀬産業の傘下になった。

本書はかつて、栄光の極みであったときから、経営破たんの責任をとらされるまでの社長であった林原 健（以下敬称略）がその反省をこめて、同族経営への警鐘を鳴らした株式会社林原の破たん顛末記である。

中堅・中小企業では多くの場合が同族経営である。我々がお付き合いをしている中小企業も同族経営は多い。本書がなんらかの形で参考になることも多いと思われる。

実は本書を読んでいて、1998年に倒産した三田工業（現京セラドキュメントソリューションズ株式会社）の当時の社長三田順啓を思い出す。彼も林原 健も共に私の大学の後輩で、三田とは何回か食事を共にし、その時に経営に対する警鐘を鳴らしたことを思い出す。この二人は共に優秀なエリートだった。文化に対

する造詣も深く、企業メセナにも熱心で美術館を経営したり、貴重な存在ではあったが、厳しい企業経営には問題も多かった。

本書では素直にその問題点を自身で反省している。これは読者にも大いに警鐘を鳴らすことになるだろう。

さらに本書では著者が心血を注いだ開発への情熱も語られている。少々未練がましい点でもあるが、研究開発の視点で見ればこれはまた色々と貴重な示唆をも含んでいて貴重なものがある。

かつて経理を担当していた弟の林原 靖常務が「破綻 バイオ企業・林原の真実」という本を出している（ワック株式会社、2013年）。本書はややそれに対抗するものとなっているが、本書のほうが真実にちかいものと推測する。

（梶原 記）

